

2015年7月18日

全体討論

パネラー：石見 清裕
堀 哲郎
張 允禎
司会：高久 健二

高久：最後に、今日ご講演いただきました3人の先生方を含め、6時までですので、50分ぐらいという非常に短い時間ではありますが、少し討論をしてまとめていきたいと考えております。

さっそく、入っていききたいと思います。

今日は3人の先生方にそれぞれのテーマでご発表をいただきました。1時間という限られたお時間でしたので、おそらくもう少し追加したいという内容があったのではないかと思いますので、まずはおひとりずつ、言い足りなかった部分がありましたらお話いただきたいと思います。

石見先生からいかがでしょうか。

石見：別にない場合はいいのでしょうか。

高久：よろしいでしょうか。わかりました。

では、堀先生いかがでしょうか。

堀：今回、日本列島に馬がどうやって入ってきて、馬の生産をどういうふうに展開していったかということをお話させていただきました。基本的に、古墳時代のこういった研究は、古墳から出てくる馬具と、それから集落がどうなっているかということを中心に研究が進んでいます。

しかし、馬をどこでどういうふうに飼っていたかというのを検証したり牧というのはどういうものかということ遺跡から発掘調査して見付けるのは非常に難しいわけです。なぜかと申しますと、牧場を想像していただくとわかると思いますが、草原を柵で囲ってその中に牧草を生やして飼うというものが、1000年も1500年ものちの時代に出てきたとしても、何か柱を建てたということがわかって、多くは広大な牧草地ですから、これが牧だという証拠を見付けるのは非常に難しく、そういうわけで古墳時代の研究は馬具を中心に行われているわけです。

そういったなかで、集落、今回は部屋北遺跡等も紹介いたしましたが、ここから馬を飼うのに必要だった製塩土器のお話を少しいたしました。こういった補強材料からやっていたのが現状です。

その中で、今回は東北のほうを取り上げましたが、馬を通した人と人との交流というのが今後

の課題ではないかと考えております。

高久：ありがとうございます。考古学的な資料から牧場を復元するということはなかなか難しいことでもあります。堀先生が今回取り上げておられました、特に群馬県は火山灰下遺跡とって、火山灰に埋もれた遺跡が現在も金井東裏遺跡等で発見されております。そういった火山灰下遺跡であればそういうものがわかる事例もあるということで、今後の発掘調査等に期待していきたいという部分でもあります。

では、張允禎先生はいかがでしょう。

張：私もあまり話をするがありません。

動物の副葬に関しては、いろいろな話ができると思いますが、いまの段階での私の能力がそのぐらいだと思います。実はモンゴル、特に匈奴が活動しているところにおいて、よく知られている匈奴の墓は紀元前2世紀から紀元後1世紀に集中しております。先ほどご覧になった地図にいろいろな記号で表示されていたと思いますが、それは墓の大きさ・形等が含まれております。その中で、私は今日はふれていませんが、動物の種類との関係は中国の先史時代以降や金時代の動物の副葬との関係も無視できないと思います。匈奴が活動する前の内モンゴルのようなところで、中国の金時代や周時代に動物の副葬が全然なかったかという、そうではありませんで、やはり中国との関係をもう少し具体的に調べる必要があると思います。以上です。

高久：ありがとうございました。

では、さっそく討論のほうに入っていきたいと思います。今日、お2人の先生から馬に関する研究発表がありました。私は考古学ですので、文献史学の成果には非常に興味を持っておりまして、最初にご発表いただきました石見先生は、特に最近増えつつある墓誌を史料にされまして、ソグド人のあり方というものを克明に研究されたものをご発表いただきました。我々考古学をやっている人間からすると、墓誌というのは咽から手が出るほど欲しい史料でありまして、我々が一生懸命考えても、墓誌の内容でほとんどわかってしまうという、考古学からはなかなかわからない内容が、克明に知ることができるという非常に魅力的な史料であります。

そこで、最後に石見先生が、ソグド人が唐代の国家馬政に関与していたというお話をされました。特に馬の飼育ですが、これは私も初めて耳にした内容でありますので、もう少し具体的に、当時のソグド人が関与していた馬の飼育のあたりからお話をいただきまして、半島、そして列島へとつないでいきたいと考えております。

石見先生、いかがでしょうか。

石見：今日は何だか私だけが全然テーマが違う話をして、トンチンカンな話だったようですが、馬の飼育、「馬政」といいますのは、これはソグド人だからこうしているということではなく、基本的に国家牧場はこのように経営しております。

まず、馬が各牧場で生まれまして、生まれてしばらくした段階で雄と雌とに分けます。その中

でいい馬になるであろう候補の馬とそうではない馬とに分けます。そして生まれた牧場の焼印を押し、どこの出身の馬かということがわかるようにします。いまでも競馬を見ますと、ダービーというのは3歳馬ですが、馬が本当に全力を出して働けるのは3歳から数年間ぐらいです。ですから基本的に3歳になるときに選んで、どこに送るかという焼印を押し、最高の馬が皇帝の近衛兵の厩舎に送られるわけです。

それ以外の馬は、近衛兵の馬に使えないにしても、都の役所から役所へ物を運ぶ輸送手段としてや、駅伝制の駅馬としての移手段という仕事もありますので、そちらのほうに送ります。3歳までにそういうふうに移り分けて、そのほか労役的な仕事をする馬であれば、うまくすれば20歳ぐらいまで使えるのですが、現実的にはそこまではいきません。

皇帝の近衛兵の厩舎にはそのようにして選り分けられた馬が集まってきますが、今度はそれらの馬を毎年どの程度太らせるか、あるいはこんなに太ってしまったら役に立たないというケースもありますし、もっとパワーをつけなければ実際には使えないという場合もありますので、そういった管理を皇帝の厩舎の人がやります。一般には、先ほど私の話の中にも出てきましたが、ソグド人も入っている官牧体制でも、そのようにして選り分けて都に送る、あるいは地方の必要なところへ送るといったかたちでやっていました。

また、各牧場では一定の割合でこれ以上死なせてはいけないという決まりや、このランクよりも出生率が下回ってはいけないという決まりがあります。それは年間、百頭単位で決まっています。もし、決まりよりも多く死なせてしまったり、決まりよりも子どもが生まれる数が下回ったりすれば責任を取られます。どういう責任の取り方かは忘れましたが、「棒叩き」だったかもしれません。

大雑把に言えば、そういうような体制です。

高久：ありがとうございます。

いまのお話は、考古学的な史料からはまず絶対にわからない内容でありまして、我々はそういうものを参考にして、物質史料の解釈をしていくということをやっていくわけです。

次は、馬の飼育ということで、朝鮮半島における馬の飼育の事例です。先ほど堀先生がおっしゃったように、馬の飼育の実例を考古学的に証明することは非常に難しいのですが、そういう可能性のあるものも含めて、朝鮮半島、特に三国時代における馬の飼育というのはどのようにとらえられたのかについて、張允禎先生にお話いただきたいと思います。

張：韓国でも馬の飼育に対しては非常に興味もたれているのですが、飼育の存在といいますが、その根拠をどこでとるかが問題になると思います。

まず、牧の位置がどこにあるかですが、文献等に馬が飼育されたということが知られておりまして、実際に地名も出ていますが、その牧としての存在はまだ確認されておりません。私が今日発表したように、馬が副葬されているといわれていますが、その副葬の量と飼育の量を一緒にするかというところは、たいへん難しいところだと思います。

そして、馬具を利用して馬の飼育がいつから始まったかという点ですが、先ほど堀先生がお話

した日本列島もそうですが、江華（カンファン）島の場合も馬具の存在がいつから出ているかによって馬の飼育関係との話ができると思います。しかし、韓国で馬具の存在が知られている一番古い時代において、一番簡単な馬具は鑣枝轡とその前の馬車の存在で話ができると思いますし、楽浪では馬車の存在が認められます。

そのときに使われている轡の形と、三国時代に使われる非常に簡単なハミ枝轡の形をとって、韓国の研究者の中では馬車用、乗馬用という分け方にして、馬の使い方を区分できるのではないかという話ができると思います。それに関しては、ここにいらっしゃる内山（内山敏行）先生が私よりもいろいろな話ができると思いますが、先生いかがでしょうか。

高久：栃木県の内山先生、いかがでしょうか。ご指名ですので、ぜひコメントをお願いできればと思います。

（フロア）内山：私でなくても詳しい方がいらっしゃると思いますが。馬に乗るといいう使い方をする場合は、轡だけで馬に乗ることは難しいので、鞍と鐙が必要になると思います。特に鐙が出現する時期でいえば、おそらく中国北部であれば4世紀までさかのぼり、韓国北部であれば4世紀の後葉、韓国南部であれば5世紀の前半くらいまで遅れるだろうと思います。日本の場合、韓国よりもわずかに遅れますが、おそらく5世紀前半に馬に乗る習慣が入ってくると思います。

張允禎先生がおっしゃるように、韓国の場合には馬に乗るといいう前に、轡だけが使われるという段階があり、三国時代に先行する原三国時代からそれが行われていました。しかし日本の場合には、馬に乗ることが馬を使うということと同時に入ってきますから、韓国よりも遅れることになると思います。

高久：ありがとうございました。

半島の状況において、飼育の実態を知ることはなかなか難しいものがあるって、遺跡で出てくることはあまりありません。そのへんで日本の研究が重要になってくるのではないかと思います。韓国の史料から日本のものを考えるということが一般的なのですが、これに関しては日本のほうが史料が多いのではないかと思います。

先ほど、葦屋北遺跡等の事例を挙げられましたが、もう少し馬の飼育に特化して堀先生から説明をいただきたいと思います。当時、飼育されていた馬がどのような馬だったのかも含めてご説明いただければと思います。

堀：先走って冒頭に似たような内容をしゃべってしまいましたが、古墳時代の馬がどのぐらいの大きさの馬だったかということをおっしゃると、いま競馬や牧場にいるようないわゆるサラブレッドといわれるような馬よりももっと小さくて、少し小さすぎるかもしれませんがポニーのような、馬の背中が地上から120センチ、130センチぐらいの小さめの馬が主に飼われていたのだろうということが骨からわかっております。

飼育に関していいますと、先ほど申し上げましたように、当時の牧の実態がどうだったかを検

証するのは非常に難しいので、具体的なことは言えませんが、葦屋北遺跡の近くに奈良井遺跡がありまして、私は実際には見ていないのですが、そこから馬の鞭ではないかという木製品が出ております。鞭があるということは、おそらく調教を行っていただろうと考えられるわけです。

日本列島でどのように馬を飼っていたかというのを古墳時代当時に検証するのは難しいのですが、後々どういうふうになっていくかということを検証することによって、昔はどうだったかを想像することができます。これは白石太一郎先生が研究されたのですが、江戸時代に千葉県佐倉市の佐倉の牧というところでどうやっていたかを検証しましたところ、牧草が生えているところに馬を放牧し、ある程度時間がたったらその中からいきの良い馬を選び、それを捕まえて調教しており、成長はある程度自然まかせであったという状況がありました。江戸時代でそうであったのだから、さかのぼっていてもそれほど変わらないのではないかとされています。

もう1つ、日本列島とそれ以外の地域における馬の飼い方の違いとして、去勢があったかどうかということが1つのポイントとしていわれています。これは佐原真先生の研究ですが、明治時代に欧米列強と馬を並べる機会があり、ほかの国の馬は去勢してあるので大人しくしていたのですが、(日本は)牡馬が牝馬に反応して暴れ回って押さえつけられなかったそうです。そういった記録が残っております。

長い伝統の中で日本の馬の飼い方というのは、ほかの地域とは違った道を歩んだかもしれません。

高久：ありがとうございます。

どういう馬を飼っていたかという研究としましては、例えば火山灰の下に馬の足跡が残っておりまして、その足跡の大きさから馬の体高を計算するという研究も日本では行われておりまして、いろいろな角度から、当時どういう馬を飼っていたのかという研究が行われております。

続きまして、日本列島に入ってくる馬文化の性格をとらえてみたいと思います。

馬文化とひとくちに申しまして、いろいろな性格をもっていると思います。今日の石見先生のご発表では、ソグド人が、特に馬政に関与し、軍人として活躍していたということだったかと思っています。軍人ということですから、馬を実用に使うような軍隊にソグド人は何らかのかたちで関与していたと考えられるのではないかと思います、そのへんにつきまして先生のお考えを少しお聞きできればと思います。

石見：もし私のレジュメがございましたら、3ページの上に、西魏と北周、東魏と北周が対立していた地図がございます。一度、西魏が洛陽方面まで行って、洛陽の西側で大敗します。西魏のリーダーがこのままでは東魏に太刀打ちできないということで、もっときちんとした軍事組織をつくらなければダメだということになりまして、各地にいる郷兵や郷団を持っている有力者にそれぞれ地位を与えて、各地の民兵をそのまま国家軍に組み入れるという政策をやりました。これが高校の世界史等も出てくる、隋や唐の「府兵制」というものの原点だといわれています。

その際に、いままでではおおよそ考えられなかったのですが、ソグド人たちがけっこう動いてくれました。そういうかたちで現れてきています。ですから、基本的にははじめは西魏を建てた人

も、東魏を建てた人も、のちに隋や唐を建てた人もみんな北から入ってきた北方民族です。唐は名門の李氏と名乗っていますが、もともとは大野（ダイヤ）という苗字で、日本人であれば大野（おおの）さんで何ら問題はありませんが、中国で大野氏といえばそれはおかしいわけです。隋も名門の楊氏だと名乗っていますが、もともとの姓は普六茹とって、どこの馬の骨ともわからないような奴だったわけです。

そういう人たちが入ってきたときには、自分の配下の兵をもって動き回っていました。ところが、やがて中国の内部に入ってくるとそれだけでは限界が出てきまして、各地の郷里兵を組織して組み込まなければとても対抗できないという状況になってくるわけです。史料はその段階になると現れてきています。

こういう墓誌が出てきたことによって、「なんだ、ソグド人はこういう動き方をしているじゃないか」という、そういう目で編纂史料を見てみますと、この人がこういう苗字で、配下にけっこうな郷団を率いているが、これももしかしたらソグド人ではないかという可能性をピックアップできますが、それを証明することはできません。ですから今日はそれを入れていませんが、そういう状況で現れてくるということです。

高久：ありがとうございます。

では、それを今度は馬文化との関係につなげていきます。実は多様な馬文化が半島で展開いたします。1つの流れではとても追えないほど、非常に複雑な入り方をするのが朝鮮半島の馬文化です。ひとことで朝鮮半島の三国時代の馬文化の性格をまとめてくださいとお願いするのは、非常に酷かと思いますが、あえて張允禎先生に朝鮮半島の三国時代の馬文化というのをどういう性格としてとらえたらいいのか、どういうふうな馬文化が展開していったのかを、例えば軍事的な側面、あるいはそうではない側面といったところからご説明いただきたいと思います。

張：大変難しい質問ですが、先ほどの堀先生のお話にもありましたが、馬の大きさとの関係もあると思います。三国時代の馬は西洋の馬のように大きくなく、130センチ程度の大きさだと考えられています。文献等に表現されているのは、低い果物の木の下を歩けるような馬だろうということがあります。このような背の低い馬がどのくらい走れるか、人が乗るための鞍、鐙等の馬具をすべて装着した段階で、どのくらいスピードを出せるかというところは私も気になるところです。なぜなら、韓国は平地よりも山地が多いわけですから、戦争をするときに馬がどのくらいスピードを出せるか、それによって役に立つかが非常に気になるところだからです。

実物の馬具はあまり出ておりませんが、私の発表でも少しお見せしたように、高句麗の古墳の中に壁画が残っておりまして、そちらには本当に立派な騎兵隊が描かれており、騎兵隊が持つ武器や甲冑まで表現されていまして、それは想像のものではあり得ないぐらい事実に表現されていますので、韓国では三国時代にその騎兵隊があったであろうと思っています。

それを墓から出土している馬具や武器、甲冑との関係から総合的に検討しなければお話ができないと思います。南のほう、例えば韓半島の南のほうというと、新羅、加羅、百済といえますが、加羅は実用、装飾用で馬具の用途が分けられていますが、新羅では、先ほどお見せしたような板

状といますか、金銅製、金製等さまざまな金ピカの馬具を実際に使ったのかどうかについては、そうではないだろうと、支配者たちがパレードなどをするときに見せる為政品といますか、装飾品だと考えている研究もあります。

しかし、それが本当に装飾品でわかるかという、違う部分もあると思います。本当に軍人が使ったかどうかはわかりませんが、実際に使われて補修している部分もあると最近の研究で証明されています。ですから、金銅で作られているからそれは装飾品だとはいえないのではないかと思います。

新羅や百済では、高句麗で見られるような大規模な騎兵隊があったかどうかということについては、申し訳ありませんが確信できません。

高久：古墳に副葬されている馬具からだけでは、実際にどのように使用されているのかという使用の実態を推定することは難しいのですが、張允禎先生がおっしゃられたように、「使用痕」という使用したときにできる痕跡が遺物に残る場合があります。そういうところから実際の使用の状況を復元するというのを考古学的にはやっています。

同じ質問になりますが、堀先生はいかがでしょうか。日本列島の馬文化の性格ですが、古墳時代でけっこうですので、どういう性格の馬文化が日本列島に展開していたのかについて教えていただければと思います。

堀：ひとくちに性格とってまとめるのは非常に難しいのですが、日本列島で、特に古墳から出土する馬具を見ていきますと、時期によってそれぞれデザインや構造が異なります。おおよそですが、5世紀前半は百済、金官加羅等の地域の影響が見られるようになります。それが5世紀後半にさしかかるところになってきますと、百済、それからそれに代わって大加耶地域の影響が馬具に見られるようになってきます。さらに6世紀の後半ごろになると、今度は新羅の影響が強く見られるようになってきます。

このように、そのときそのときによって、おそらく日本列島が交渉していた地域の影響が馬具にも現れていたのではないかと考えられます。馬具で特徴的なのは、そういった地域で生産されたものが日本列島にやってきますと、今度はそれを模倣して日本でつくっていきます。そこから少しずつ、日本列島の中でもつくるようになってくると、オリジナリティが出てくるという特徴があります。

日本列島では、戦闘行為において馬に乗った騎兵隊等がどうであったかを検証することは非常に難しいのですが、人物埴輪等から、当時どういった服装をしていたかを考えることがあります。そういうものを見ていきますと、たしかに馬に乗った埴輪はあるのですが、いかにも戦闘しているなというものはなかなか見付けるのは難しいものです。では、どうしたらいいかと申しますと、古墳の副葬品のうち、馬具以外に武具を見ていきますと、古墳に馬具を本格的に副葬するようになりますと、^{よろい}甲の構造や形が変わってきます。これまでは鉄板を留め合わせてつくっていたような甲から、小さな鉄板を重ね合わせた動きやすい甲が副葬されるようになってきます。馬に乗って槍や弓を使うときに身体を動かさなければ使えないわけですから、おそらく馬に乗って戦う人

もいたであろうとことが推定できると思います。

高久：ありがとうございます。

会場のほうに、日本の馬具研究では非常に有名な宮代（宮代栄一）先生がお見えになられています。少し、宮代先生に今回の発表を聞かれて、東アジアの馬文化の性格、特に日本列島の馬文化の性格についてひところコメントをいただければと存じます。

（フロア）宮代：今日は大変専門的なお話を、しかも新しいお話を興味深く拝聴しておりました。

私は馬具が専門なのですが、日本の馬具、特に堀先生のお話は、5世紀代に日本に入ってきたからの馬具の展開と生産、それから馬匹生産の動きについてわかりやすくお話していただきまして、大変勉強になりました。

これは張先生にお聞きしてもいいのかもしれませんが、今日は諫早（諫早直人）さんはお帰りになりましたが、特に韓半島では日本の馬具のルーツになるような馬具が最近たくさん出てきていまして、それはいま堀先生がおっしゃったとおりなのですが、6世紀に入ってきますと、おそらく日本に新羅の馬具が入ってきたのだろうといわれています。しかし、それに類する馬具が新羅のほうで見つかっていませんので、それをどう考えたらいいのかという問題があると思います。まず、今日思ったのはそれが1点です。

張先生の銀製装飾については大変興味深く拝見いたしました。小さいほうと大きいほうがあって、特に大きいほうをどうやって取り付けるのかということについては、先生もおっしゃっていましたが、あれを杏葉と考えていいのかというのはまだ検討が必要だと思っています。ただし、今日拝見した限りでは、内モンゴルも全部含めた銀製装飾の用途に、型式学的に初めてちゃんと挑戦された論文だと思っていますので、今日これを聞いた人は大変ラッキーだと思っています。以上です。

高久：ありがとうございました。

質問にお答えする時間があまりありませんので、先に進めたいと思います。

先ほどの宮代先生のコメントにもありましたが、私も今日初めて張允禎先生からご発表いただいた銀製装飾の話聞いたわけですが、馬具をやっている人間にとってはかなり興味深い話でした。そのへんの詳しい話は時間もあまりありませんので、今日は割愛させていただきたいと思います。

次にお聞きしたいのは、今日のテーマの「人流」です。あまり馬の話ばかりしておりますと、肝心の「人流」のお話がおろそかになってしまいます。馬がひとりで歩いてくるはずはありませんので、当然人の移動があったのは間違いのないわけです。少し魏晋南北朝、唐代初期に至るぐらいの時期の、東アジアではなく、ユーラシアの人の移動ということについて石見先生にご説明いただければと思います。

石見：すごく難しいのですが、そもそも中国人がどこから来た民族なのかということですが、第

1次世界大戦前の帝国主義時代にもとはシュメール人だの、エジプト人だのとトンチンカンな説がたくさん出されましたが、その後考古学の進展に伴い、新石器文化を見ますと、各地域に文化類型ができていまして、それがおそらく秦を経て、漢の時代の、しかも華北で1つの、共通の文化圏ができて、それが中国人の原型であろうといわれています。

ただ、前漢の時代、単純に中国は華北と江南とで分けてしまえば、前漢の戸籍で把握している人口は9割方が華北で、江南にはほとんど統治力は及んでいなかったのではないかと思います。これが逆転するのが唐の後半から北宋時代にかけてでありまして、今日、江南のほうが人口比率が高く、経済の中心も江南のほうにあるというのはその延長線上にあるということだと思います。

もう少しさかのぼって、漢魏晋期の中国人は、おそらく漢をつくった人たちの子孫だと思われませんが、そこに初めて本格的な大きな民族の動きが入ってくるのがやはり五胡十六国のころと見てもいいと思います。ただし、ゲルマン民族大移動がそうであったように、中国で東ユーラシアに及ぶ民族移動も1回で済むものではなく、何波にも分けて移動が起きます。いつを最終的な移動とすればいいのかということとはなかなか難しいのですが、隋ができ、唐ができて北方の東突厥が滅べば突厥人が200万人という単位で中国に南下してきますし、高句麗が滅べば——私が若いころにはおおよそ考えられなかったのですが、いまは中国に移住して亡くなってしまった高句麗人の墓誌が二十数点見つかっておりますし、百濟人の墓誌は十点ほど見つかっていて、本当に凄い時代になったなと思います。

このように常に移動は起こっています。ただ、大きな動きということでは、魏晋、五胡十六国から唐の始めあたりに1つ大きな動きがありました。もう少し広く見れば、9世紀の中頃に、日本の僧侶の円仁が長安に滞在しているときに、北方の遊牧民族がウイグルの可汗政権を崩壊します。それをきっかけとしてトゥルク民族の西方移動が起り、やがてトゥルク人はセルジュークというトゥルクになって、西アジアに現れます。

オスマントルコになって現れて、オスマン帝国をつくったのはトルコ人だといわれていましたが、オスマントルコという呼び方はなくなりました。あれは、ヨーロッパ人が勘違いして「トルコ人」と呼んでいたのだそうです。彼らは、自分たちは「オスマン人」だと言いますが、「トルコ人」だとは言っていないらしく、移動していく過程でいろいろな民族が混じり合ってきたのが「オスマン人」というものであるらしいのです。それをヨーロッパ人が「トルコ人」と間違っただけで呼んでしまって、「オスマントルコ」と呼ばれていたのですが、それが間違いだとわかり、いまは「オスマン朝」あるいは「オスマン帝国」と教科書でも名前が変わったはずですが。

世界史では、やはり9世紀の半ばから起るテュルク族の西方移動がやはり大きいと思います。テュルク人が中央アジア方面に移動してから、少し人口密度が低くなったモンゴル高原に12世紀ぐらいからモンゴル人が移住してきて、13世紀に大帝国をつくっています。

大雑把な話になりますが、細かな話はとてもいまお話しできませんので、そんなところではないでしょうか。

高久：ありがとうございました。難しい質問をしてしまって申し訳ありませんでした。

先生の話は、我々古墳時代をやる人間にとっては、五胡十六国が重要だというのは非常に興味

がございまして、まさにいまやっている馬文化において、五胡十六国との関係が最近非常に注目されているところです。それも含めて張先生、いかがでしょうか。五胡十六国も含め、半島への人の流れというものを簡単でけっこうですので、お話しいただけますでしょうか。

張：もともと私は馬具をやっておりますので、馬具というのは細かい話で、つくりがどうなっているか、角度がどうなっているかというようなところに目が向いているかもしれませんが、その形を細かく見ると、それをつくったのは人間ですから、韓国で出土している馬具がすべて韓国でつくられたものかはわからないわけです。モノが動くとき、それは人と一緒に動いているのか、あるいはそのものだけが動いているのかということも馬具に（影響を）与えると思います。私は考古学をやっている者として、モノを通して当時の人を描くということがいちばん最高の目的だと思いますので、馬具はそれを使う騎馬文化というところでよく話をしますが、韓半島で騎馬文化が生まれたのではなく、「入ってくる」という言葉を使っています。しかし馬具が入ってきたので、人が入ってくるのだということがいえるのかは難しいところです。

そこで私が注目しているのが、今日発表した動物の副葬になります。人を埋葬する方法というのは変わりにくいというところがあります。人を埋葬する方法というのは、人が守っている方法、方式、その家族が守る方式との関係もあると思いますので、その部分からすると、きょう私が発表したモンゴル地域と中国の内モンゴルで活躍した匈奴は、モンゴル地域は北匈奴、中国の内モンゴルは南匈奴というふうにその民族を分けていまして、次は鮮卑、扶余というふうに民族に分けています。

考古学的に、動物の副葬や馬具で民族を分けることができるのかということについては個人的に疑問を持っています。韓国では、入っているものとして韓半島の三国時代の騎馬文化の基になっているのは、鮮卑系の三燕等とよくいわれています。鮮卑系の馬具と似ているところはとても多いのですが、その前燕と鮮卑系の人が入って、韓半島に入ってきたのかということからはわかりません。こちらの人が絶対に韓半島に入ってきたのかということからは難しいところだと思いますし、馬具や馬を研究している者としては、そう言える段階になればとても嬉しいと思います。

高久：モノの動きは考古学的にはとらえやすいのですが、その背後で人が動いたのかどうかという判断はなかなか考古史料からは難しいと思います。

会場のほうに、まさに列島への人の動きを研究され、成果を出されておられます駒澤大学の酒井（酒井清治）先生がおられますので、半島から列島への渡来人、人の動きというものを考古学的にどのようにとらえられるのかについてご説明いただければと思います。

（フロア）酒井：先ほど堀さんがお話しされたように、これもなかなか難しいことではありますが、時間がないので簡単に申し上げますと、日本にはもともと人が住んでいなかったわけですから、ほとんどが旧石器時代に渡ってきた人だと、大陸から渡ってきたということは明らかであります。縄文時代のころ、あるいは弥生時代から始まる弥生文化の原点は朝鮮半島あるいは大陸にあります。そのとき大量の人が渡ってきたということは土器あるいは住居、いろいろな青銅器文化もす

べてそういうところに関わるわけです。

次に古墳時代の4世紀から5世紀にかけてまた大量に渡ってきて、日本の技術あるいは文化に多大な影響を与えたということは、出土遺物からわかります。さらに、その次の飛鳥以降ですが、いわゆる朝鮮半島内の戦い、660年の百済の滅亡、あるいは663年の白村江、あるいは668年の高句麗の滅亡によって倭にたくさんの渡来人が来たということは文献の上から明らかになっているのですが、では、土器からといったときに、弥生時代にはたくさん入ってきますが、古墳時代の4、5世紀には畿内あるいは九州に朝鮮半島の土器がたくさん出てきますから、このところから人がどこから来たかを追うことは十分に可能です。

しかし、入ってきた人たちの技法をもった土器の叩き技法は5世紀後半にすぐに消えてしまうということで、土師器化してしまいます。土器から見ればそういうことにはなりますが、おそらくその人たちには渡来人だという意識はあったことは、それはそののちの平安時代の『新撰姓氏録』等を見れば3分の1が渡来系だと考えられることから、意識はずっと渡来系でした。

しかし、残された渡来系文化から渡来人をうかがい知ることがなかなか難しいわけです。そういったなかでは、先ほど堀さんが叩きをもった土器のお話をされましたが、そういうところから追うことも十分に可能でありますから、まだ私は望みは捨てておりません。馬具から人との関わりを知ることは難しいのですが、積石塚あるいは馬匹生産といったところから追うことがまだ十分に可能だと思っており、それは今後の研究次第だと思っております。

高久：ありがとうございます。

馬具だけというのではなく、複合的に渡来人の存在、移動を考えていくということが考古学の手法ということになるかと思えます。

もうすぐ時間になってしましまして、あまりまとまりませんでした。会場のほうに平川南先生がいらっやっていますので、最後に総評といえますか、全体に対するコメントを頂戴できればと思っております。よろしく願いいたします。

(フロア) 平川：総評などとてもできません。

私はこのシンポジウムを楽しみにして、きちっと申し込んで、聞かせていただきました。張先生をはじめ、石見先生の弁舌爽やかな石見節も久しぶりに聞かせていただきまして、石見先生のスケールの大きな民族の移動の問題というのは、これから我々がいちばん重視して考えていかなければいけないのではないかと思います。堀さんは馬の分布の問題等を考古学的に追いかけていらっやいました。

最後に総括ではありませんが、私自身、近年馬に関心をもっていますのは、福岡県糸島半島の元岡遺跡と大宰府から出土した2点の馬に関する木簡の解読に関わったことです。特に元岡遺跡では西暦701年の段階できちんと何歳馬、牡・牝、そして胸が白いという身体的特徴までつかんでおり、さらに大宰府では、690年代の人に関わる戸籍と一緒に馬の戸籍が進上されておりました。まさに人馬一体で把握されていたのです。それほど馬というものは我々の歴史文化において、現在に至るまで非常に大事な、特別な動物であったということです。

そのあたりを、今回のユーラシア全体の問題、東ユーラシアの人流の中にぜひ加えて、今後も追跡していただければという期待を込め、そして我々もそういうことに向かって研究を深めたいと思います。

本日は、本当に有益なシンポジウムをありがとうございました。

高久：先生、どうもありがとうございました。

時間が過ぎてしまいました。議論し尽くせない部分も多々あったかと思いますが、最後に人の移動「人流」まで辿り着いたかなと思います。

本日は6時まで、長時間にわたりましてご参加いただきまして、誠にありがとうございました。本センターでは、また今後もこのようなシンポジウムを行っていく予定であります。次回は11月に違うテーマでこのようなかたちのシンポジウムを予定であります。それにつきましては、いろいろなかたちでご案内していきたいと考えておりますので、どうぞ、今後ともよろしく願います。

きょうは3人の先生方、どうもありがとうございました（拍手）。

【了】